
桜涙雨を越えて。

夢来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜涙雨を越えて。

【Nコード】

N6109R

【作者名】

夢来

【あらすじ】

桜舞う四月。高校に入学して、初めて出会った彼のことを、今でも鮮明に覚えている。——いつか、きっといつの日か、彼と“一緒に”に笑いたい。だって、私たちの転換点は、いつでも桜時なのだから。

図書館にて、（前書き）

これは私が現在連載している短編集、“ある凸凹な二人の話”の中の、数話をまとめた小説です。

元が短編集なので、もちろんこれだけを読んでも内容は分かります。また、だいぶ加筆と修正を行っているので、“凸凹な二人”の方ですでに読んだという方も、お楽しみ頂けるかと思います。

それでは、ごゆっくりお読み下さい。

図書館にて、

高校に入学して、初めて出会った彼。

一番最初のロング・ホームルームでの自己紹介で、とてつもなく不愉快そうな顔をしていたのを、今でも鮮明に覚えている。自分の周りに人を寄せ付けられないような、また、寄せ付けたくないとも言ふような、強固な壁を造っているようだったから。

それからすぐに、私の考えは正しかったということが証明された。

まず、彼はいつもどこかを睨み付けていた。何か物や人を見るとときひよう、と鋭い視線の矢を放ち、途端に標的を貫き通してしまうのだ。

そんな彼だから、誰も近付こうとしなかったし、ましてや、彼の方から他人に近付くなんてことは絶対になかった。

そうして、彼はいつも自分の席で、ずっと医療関係の本を読んでいたのだ。

——ただし、その時の彼の眉間には、あの深く刻まれた皺は見えない。一切合切自分に構うなというオーラを醸しつつ、実に真剣な表情で、食い入るように文字列を目で追っているのである。

その頃の私と言えば、彼の、“目に映る全てのものが憎たらしい”と語る視線にぞくぞくしたり、一心に本から知識を得ようとしている彼の横顔にときどきしたりしていた。

それから三月程経ったある日。中学時代から、下校時には必ずと言っていいくらいの頻度で通い詰めている図書館で、私は彼を見掛けた。

この時すでに、彼は同級生等に、クラスの異端な存在として扱われていたのであるが、毎日休むことなく学校に登校していた。だが、図書館で彼を見掛けたのは、これが初めてである。

彼は医療関係の本が並んでいるコーナーで、分厚くて重たそうな本をパラパラと捲っていた。

真剣そのものな表情の彼に、やっぱりどきどきしたけれど、私はそれを悟られないように、平然を装って文学コーナーに向かうのだった。遠回りして医療コーナーを避けることも出来ただけけれど、何かにつけて言い訳をしては、私はいつも彼がいるコーナーの側の通路を使っていた。

——これは、彼が図書館に通うようになって、一月くらい経過したある日の話だ。

いつも下校時に寄る図書館。高い本棚に囲まれ、静寂に包まれたその空間は、一種の神聖さを感じさせる場所であった。

私はいつものように、館内の奥側に設けられた文学小説コーナーを

真つ直ぐに目指した。ふと通りすがり際に医療関係の本のコーナーに目をやったが、そこにはいつも見掛けるクラスメートの彼の姿はなかった。

……この時間帯はいつもそこに彼がいるのに、今日はどうしたのだろうか。もちろん、私だって毎日来ている訳ではないのだから、今日彼が来ていなくても不思議はないだろう。

しかし……いつもいる人が見当たらないと無性に気になるものだ。

廊下を歩く数十秒の間、私は彼のことを考えていたが、目的のコーナーに辿り着いたと同時にその思考を打ち切った。

そもそも、私と彼はそれほど仲がいい訳でもないのだ。それどころか、かつて会話をしたかどうかさえ怪しい。

設置された本棚には、相変わらず埃を被った分厚い文学集たちが陳列していた。今日の私は芥川作品の気分だったので、その中の“あ行”の作家を探し始めたのだが……、

「あ……」

目当てのそれは直ぐに見つかった。棚の、最も上段に。

正直私は背が低く、一五五センチにも満たない。無駄だと分かりつつ背伸びをして手を伸ばしてみるが、案の定届くはずもなかった。

早々に諦めて踏み台を探そうとしたその時――

スッ

私の背後に立った者によつて、その本が抜き取られた。

振り向いてみると、それは例の彼だった。彼は私の顔を見ると、やや驚いたような表情を浮かべ、そしてまたすぐにいつもの仏頂面に戻る。

「ええと、」

本を取ってくれたのかと思い、私はその長躯の男子を軽く見上げたのだが、彼は至極鬱陶しそうに私を一瞥すると、芥川の小説集を持ったままさつさと踵を返して去って行ってしまった。

「え……」

埃っぽい通路にぼつねんと残された私は、ぱちぱちと目をしばたたかせながら、去り行く彼の背中を見送った。

……不思議なことに、この時私が感じたのは、自分が借りようとしていた本を横取りされたことへの怒りや悔しさでもなければ、今日

も彼を見掛けることができたという、喜びにも似た達成感でもなかった。

だって、こんな人気のない——“ひとけ”も“にんき”もどちらも——コーナーの一角で、こんなにたくさんの本たちが埃を被っている場で、彼は“あの”小説を選んだのである。

例えば、彼が私の邪魔をしたかっただけだったとしてもだ。およそ私の手が届いていないあの“目当ての本”を、ああも的確に当てられただろうか？

彼があの本を借りたかっただけにせよ、単に私に意地悪をしたかっただけにせよ——つまり、偶然にせよ計画にせよ、二人がここまでびつたり同じ本を選ぶというのは……

それって私、運命を感じずにはいられない。

私はその去り行く背中を見ながら、“なんだ……取ってくれた訳ではないのか”と少しがっかりしていたが、やはり、あんなに高い場所にあるものを易々と取ってしまった彼は、実に格好良かったと考

えてもいた。

そしてその時、彼に“運命”を感じてしまった私は、我に返った瞬間、直ちにその後を追ったのである。

私が彼の元を目指した時、彼は丁度件の本を借り終えたところだった。きよろきよろとしながら彼を探し、見つけた私は、彼が図書館の出入口を出たところで、呼び止めることに成功した。

彼はいつもの如く不機嫌面であつたが、帰路を共にしながら——正しくは“付き纏いながら”——熱心に話し掛ける私に折れ、最終的には返事を返してくれるようになった。

——今になって、このとき私が行動を起こしたのは、正解どころか、得も言われぬ偉大な行為だったと思っている。

その日から、私は彼と行動を共にするようになった。

……と言っても、このときはまだ、私が彼に一方的に絡みに行っているというだけだった。

——少し話してみると、彼はとても面白い人だということが分かった。医療に関しては勿論のこと、理数系の分野に大変詳しいのだ。彼自身がたまにかますジョークは非常にセンスのないものだったが、こちらの冗談が通じないという訳でもなかった。

最初の内こそ、嫌々、渋々、迷惑そうに仕方なく相手をしてくれていた彼も、三学期が終わる頃には、随分と打ち解けてくれた。

また、彼がクラスメイトに嫌がらせを受けていれば、私はさり気無く助けに行ったし、代わりに彼は、私が重そうな荷物を運んでいる時に手伝ってくれたり、高い所にある物を取ってくれたりするようになった。

……そんな根がとても優しい彼に、私はどんどん惹かれていったのである。

図書館にて、（後書き）

「お姉ちゃんの小説、話が繋がってないから分かんない」

全ては妹のこの一言から始まりました。

——嘘です。小説を評価して下さった方にも、同じようなご指摘を頂いていました。……ですが、そんな訳で“凸凹な二人”の中に、繋がりを持たせた話を投稿したのは事実です。

しかし、各話で登場人物の身の上設定（？）が異なる小説を、途中から全て一つに繋げるのには無理がありました。よって、あつちの話こつちの話をくっ付けて、繋がりを持たせてみたのです。

そして、この小説には、“凸凹な二人”にバラバラと散らばっているそれらの話を、なんとかまとめていこうと考えています。こつちオリジナルのオチも考えていますので、お付き合い頂ければ幸いです。

以上後書き、夢来でした。

公園にて、

四月。無事二年生に進級した私たちは、又もや同じクラスになった。不器用ながらにこうして仲良くしてくれる彼と、また一年一緒にいられるのだと思うと、この関係のきっかけを築いた数ヶ月前の偉大な私を、手放しで誉めてやりたくなる。

……しかし、人間というものは、中々どうして欲深な生き物だ。彼との関係が良くなれば良くなる程、もっともつとと、更に親しい関係を求めてしまう。

だから私は、某日水曜日、だだっ広い公園の桜の木の下で、彼をデパートに誘ったのだ。

——これは、その時の彼のお話。

水曜日は図書館が休館日だから、この日はいつも近場の公園で本を読んで時間を潰していた。本日は水曜日、今日も今日とて例外ではない。

公園と言っても、およそ子供の溜まり場になるような要素は何もなく、道路に面した入口から見て左側に、ちやちな滑り台と砂場が、右隅にトイレと水道があるだけだった。

……ああ、そうだ。それと右端にはもう一つ。ペンキが剥げ掛けたせいで、かろうじて青だと分かるくらいにぼろいベンチ。今僕が座っているそれが、申し訳程度に置かれている。

そんな“広場”と呼んだ方が正しいのではないかとさえ思われる公園で、僕は春の暖かな陽の光を浴びながら、珍しく推理ものの意外のジャンルの本を読んでいるのだった。

有名な一節で始まる、梶井基次郎の作品。“桜の樹の下には”――

「桜の樹の下には屍体が埋まっている」

「は……！？」

突然、頭上から声が降ってきた。やや驚いて少しばかり視線を上げれば、僕の目の前にはいつの間にかクラスメートの女子が立っていた。彼女はいつもの“何処と無く眠たそうな無表情”で、こちらを見下ろしている。

「桜の樹の下には屍体が埋まっているか？」

所謂“変わり者”である彼女はそんな質問をしながら、僕の手の中にある本の表紙を指差して、ゆるゆるとした動作で左隣に腰を下ろしてきた。

「犬が隠した宝物か……ともすれば、近所の小学生が未来に託した

タイムカプセルが埋まっているかもしれない……？」

……僕の意見を求めているのだろうか。そう言った彼女は、ちらりとこちらに視線を送ってきた。

「桜の樹の下には……」

面白いことを言える自信はなかった。

「根が埋まっている」

……しかし、いくら何でもセンスの無さ過ぎる回答だったかと思っ
った。

何となくぎこちない動きになりつつ彼女を見てみたが、こちらを見
詰め返している小柄な女子はさほど気にしている様子もないようで、
さっさと次の話題を提供してきた。

「桜の樹の中に、元光る幹なん一筋ありける。怪しがりて寄りてみ
るに、土の中光りたり」

——彼女はそれきり黙り込んでしまい、ただじっとこちらを凝視す

るばかりになってしまった。……つまり、その先を僕に続けると？
暫く互いに無言で見詰め合っていたのだが、まるで続きを催促するかのようにばちばちと目を瞬かせる彼女に根負けし、ついに僕が口を開いた。

「それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しゅうて居たり」

致し方なく当たり障りのなさそうな古文を述べれば、

にこり

彼女は満足気に微笑んだ。——微笑んだ、と言っても、いつもより半径3ミリくらい目を開いて、口角を両端合わせて30ミリ程度引き上げたくらいなのだ。

「ねえ、君。……今週の日曜日、暇かい？」

「……は？」

ワンテンポ空けて、大変まともな話題を大変突拍子もなく口にした彼女。そんな彼女に当然僕は思考が追い付くはずもなく、阿呆みたいに気の抜けた声を洩らしてしまった。

「日曜日、川原の桜並木で桜祭りがあるらしい。私がお弁当とレジヤ―シートを持ってくるので、君は来てくれさえすればいい」

そう言い終わるかどうかの内に、彼女の表情はまたミリ単位で変化して、今は悪戯っぽい笑みでこちらを見ている。

「……何故、僕なんだ」

その表情になのか、誘いの内容になのかは分からないが、僕は意図せず鼓動が速まったのを感じ、気付けばそんな質問をしていた。

「そんな話題が出たから」

「そんな話題？」

「そう。桜の樹の下には」

「……下には？」

「花見客が付き物」

——成る程、彼女の持論か。

期待していた答えが返ってこなかったことに僕は少しばかりがっかりしたのだが、彼女は僕の返事を期待しているかのように、くりくりとした瞳を煌めかせていたので——……

寂れた公園に植えられた、たった一本の桜の樹の下で、僕が彼女の誘いに応じる、五秒前までの話。

今にして思えば、あまり可愛げのない誘い方だったかもしれない。しかし、“何故僕なんだ”とかぶつぶつ言っていた彼も、結局はこの誘いに対して首を縦に振ってくれた。

「じゃあ、日曜日の午前十時に、あの川原の橋のたもとで待っている」

——そう言っただけのバス停で彼と別れたのが、今から三日前の出来事。

そして、今日がその約束の日曜日だった。

並木道にて、

来たる約束の日曜日。私は約束した橋のたもとで、彼を待っていた。お弁当やら何やらが入った紙袋を傍らに置いて、地べたに座った状態で、私は手にした携帯電話のディスプレイに視線をやる。

そこに表示された時刻が、また一分進んだ。

現在、午後六時十八分。

——彼は未だ、到着していなかった。

私はぱちんと携帯電話を閉じると、物思いに耽り出す。今、彼がこの場にいないことについてを、考えるため。

まず、彼は約束を破ったりするような、薄情な人間ではない。それどころか、もう少しルーズでもいいのではないかというくらいに、律儀な人間である。

だから、彼がここに来ないことには、それなりの理由があるということだ。

しかし、その理由というのが分からない。何故なら、私には彼から、何の連絡も来ていないからである。……ここで、致命的なミスだ。

私たちは、お互いの連絡先を知らないのである。

いつも起きている時間の大半を一緒に過ごしていた訳だから、通信機器を使って連絡を取り合うという概念がなかったのかもしれない。それはもしかしたら良いことなのかもしれないが……今は仇となっている。

おまけに、他の高校がどうなのかは知らないが、我が校には連絡網というものがない。学校側から何か連絡がある時には、入学時に強制的に入会させられた学校のサイト経由で、生徒にメールが届く仕組みになっている。

……そんな状況だから、私はとりあえず今まで彼の到着を待っているのだが、一体いつまで待つことにしよう？

何か用事ができて来られなくなったのならいいけれど……もし事故や、最悪事件だったりしたらどうしよう……。

あれこれと考えている内に、不吉な予想がふと脳裏をよぎる。その考えを頭の中から追い出すように、私はぶんぶんとかぶりを振った。何とか気持ちを落ち着けようとした私は、立ち上がりつつくると振り向き、目下を流れる川を見渡した。

時間が時間なので、辺りに点在していた出店は、もう当然全て畳まれてしまっている。そこはいつもの川原であり、昼間のお祭りが嘘のようだった。

土手の上から、向こう側の桜を眺めること数分。夜桜のお祭りもやればいいのになと思いつつ、どんどん沈んでいく太陽に、目頭がじわり、と熱くなった時だった。

「すまない！遅くなった！」

こちら側の並木道の奥から、聞き慣れた、だけどいつもよりも切羽詰まった声が聞こえた。その声が、普段なら滅多に出さないような大きな音量で、私の名字を叫ぶように呼んだ。

それに弾かれるようにして右側に首を捻れば、キキッ、という短く甲高い音と共に、銀色の自転車に乗った彼が、私のすぐ傍に降り立った。

「は……ま……、待った、か……？ ほん、とに……す、まな……」

自転車のスタンドを掛けた彼は、腰を折って膝に手を当てた体勢で、喘ぎ喘ぎにそう言った。

八時間の大遅刻の末、ようやく彼がこの場に訪れたのだった。

「は……は……、バスでも……三十分近く掛かる距離だ……。あの時刻に出て……行きは来れたとしても……、帰りは、最後の一本に

間に合うか……分からなかったから……自転車で、来たが……はあ……思いの外、きつかった」

少しして何とか呼吸が整つてくると、彼は顔は上げないままに、ま
ずそんなことを言った。

「そう……か。大変だったのだな。何か……用事でもあったのだろ
うか？無理して来てくれることもなかったのであるが……」

待っている間、いろいろと聞きたいことはあつたはずだった。しか
し、こうして苦しそうにしながらも、約束通りに来てくれた彼を見
たら、相手を気遣う月並みな言葉しか出てこなかった。

「いや……用事という程では……ない。とにかく……すまない」

ごくり、と唾を飲み込んで、肩で荒く息をしながら、彼がやつの
ことで顔を上げる。

「あ………！？」

——そして、こちらに向けられた顔を見て、私は思わず絶句した。

彼の顔面が、あまりにも酷い有り様だったからだ。

決して悪口などではない。彼の顔は、文字通り“ボコボコ”だったのだ。

左目は腫れて上手く開いておらず、右頬も真っ赤に腫れ上がっている。また、唇の右端が切れて、その周囲は痛々しげに青紫色になっていた。

「それ……その顔……一体……」

同級生に暴力を振るわれたときでも、ここまで酷いことにはならない。

愕然とする私に、彼はバツの悪そうな表情で説明してくれた。――まず、こんな前置きをしてから。

「……こんな話、誰にもするつもりはなかったし、わざわざ誰かにしたいものでもない。でも……お前には、話しておこうと思う」

そして、彼は俯き加減だった顔を正面に直すと、私の瞳をしっかりと見詰めながら、ぼつりぼつりと話し出した。

「僕の家は…… お世辞にも家庭環境が良いとは言えない。金銭面的にも…… 人間関係的にも。」

一瞬、視線を外す彼。何かを振り払うように眉を寄せると、再び私に視線を戻し、一気に話した。

「父親がとんでもない飲んだくれの穀潰しで、しょっちゅう僕や母親に暴力を振るうんだ。別にいつものことだが…… 今日パチンコで擦ったとかで、いつも以上に荒れていた。普段なら服に隠れて見えない場所を攻撃してくるんだが…… 見ての通り、今日はこの様だ」

自嘲気味に鼻で笑った彼は、それから、ぎこちない笑顔で、「軽蔑するか……？」と尋ねてきた。私は彼のその話があまりにもショックだったため、上手く言葉を発せられず、とにかく、ふるふると左右に頭を振ることしかできなかった。

——ああ…… 知ってしまった、彼の事情。

“いつも”ということは、学校のある時も、制服の下はこんな風に傷だらけだったのだろうか……。

それなのに、毎日毎日、傍らで能天気になっていた私を、彼はどう思っていたのだろうか？

ここで彼を励ますのも、慰めるのも、嘘だと思い、私は何も言えなかった。そんな自分が、あまりにも不甲斐なくて……、

「ふ……う……ふええん………」

気付けば情けない声が漏れ、視界がじんわりと滲んでいった。

「おっ……おい！どうした！？」

彼がぎよっとする声が聞こえる。

——それはそうだ。

辛いのも、苦しいのも、私ではなく彼のはずなのに。

「う……う……ごめ……。私、でも……辛くて……苦しくて……」

ここで泣くのは彼を困らせるだけで、そんなのはただのいい子振りだ。

そう自分に言い聞かせて、なんとか泣き止もうとしていたのだが、後から後から流れてくる涙は一向に止まらない。それでもどうにかならないものかと、私は必死に目を擦ったり、ぎゅっと押さえてみたりしていた。

——その時だ。

「……ありがとう」

低い呟きが耳に届き、彼の両手が遠慮がちに私の両肩に添えられた。そしてそのまま、彼の腕の中へと引き寄せられる。

「え、あ……どういう……？」

その発言と行動の意図が掴めず、私は目を白黒させた。

「僕は、」

私のすぐ耳元で、彼の聞き心地の良いバリトンが響く。

「僕はこんなことでは泣けない……泣く訳にはいかないから……、お前が代わりに泣いてくれると助かる。それに……まさか僕の境遇に、自分のことのように泣いてくれるとは思わなかったから……、だから、ありがとう」

その発言に、せきを切ったように涙が溢れ、今度こそ、もう止まり

そうになかった。

「ふええええ……ふええええん……」

彼の右手が私の後頭部に伸びて、そのまま優しく撫でてくれた。その手が微かに震えているものだから、ああ、彼も……、彼の心も、今、泣いているのだな、と思った。

「うう……ふえ……」

私も、彼の背中に両手を回す。

二人の間に止められた自転車が邪魔な気がしたけれど、今の私たちには、これが丁度良い距離なのかもしれないと思った。

ざあつ、と吹いた一陣の風が、並木道の桜を散らす。はらはらと舞い落ちる白に近い薄桃色の花びらが、まるで涙の雫のようだった。

互いを掻き抱くようにして、私たちは、ただ静かに涙を流した。……足りない分は、桜に任せて。

——今は、これでいい。

ただど……いつか、きっといつの日か、彼の“為に”でもなく、彼の“代わりに”でもなく、彼と“一緒に”泣けるようになればいいと思った。

昇降口にて、

——これは、僕が高校三年になって、二、三日経ったある日の話だ。

僕が毎朝学校に来る時間は早い。いつも完全登校時刻の三十分前には登校している。

現在、完全登校時刻二十分前。今日だってその例外ではなく、僕はたった今、昇降口で靴を履き替えたところだった。

「おはよう」

突然、人気のない昇降口に、綺麗な声が響いた。いろいろな意味で驚いた僕は、びくりと肩を跳ねさせて、その声のした方向を勢いよく振り返る。

「おはよう」

出入口に立っていたのは、今日は早くに登校して来たらしい、クラスメートの彼女だった。彼女は後ろ手に手を組んだ状態で、もう一度挨拶を寄越した。

「あ……ああ、おはよう」

僕はあらゆる意味でときどきと高鳴る心臓を宥めるように、深呼吸を一つしてから返事をする。

「……あのね、」

しかし、彼女が珍しく可愛らしい感動詞を用いたものだから、僕の鼓動は落ち着くどころか、更に煩く鳴り響いた。

「……何だ」

僕はそれを悟られまいとしながら、出入口から一向に動こうとしない彼女に、短い答えを返す。

——そして、次に彼女がその小さな口を開いた瞬間、

「私は、ある運命的な出会いを果たしてしまった」

……それまで煩かった心音が、ぴたりと止まった。

いや、待て待て！

どうした！？どういうことだ！

よく見れば、彼女のきめが細かい頬は、薄い桜色に染まっている。
……再び、今度はかなり嫌な感じに早鐘を打ち出す僕の心臓。

彼女の発言の内容が理解できなかった僕は、間の抜けた声で聞き返してしまふ。

「は……何……どういう……こと、だ……？」

彼女は僕の方にはあまり顔を向けず、その可愛い表情のままこう言った。

「今朝は珍しく早起きをしたから、こんな時間に登校をした。すると、川原の土手に、“彼”がいたのである。彼はお腹を空かせているように見えたから、私は近くのコンビニで何か食べられそうな物を買って、それを与えたのだ」

何と返したらいいのか分からない……が、とりあえず“彼”って誰だ！？

絶叫したい気持ちになりつつ、僕は彼女の話に更に耳を傾ける。

「彼はとても色が白くて、黒目がちな目が大きくて、そして、すごい

く小さい。そんな彼にときめかない人間なんていないだろう。だから……だから……、」

彼女を虜にして、ここまでのことを言わせる相手……。一体どこでいつだ！？

わなわなと震え出す右手を握り締め、僕は彼女の言葉の続きを待つ。

「だから……私、連れて来てしまったのだよ！」

重大告白をするかのように、彼女は力を込めた発言をした。

……は？連れて来ただと！？

ついに俗に言う“マジギレ”をしてしまいそうになったその時、

「みゅー」

彼女が前に持ってきた腕の中で、白くて、黒目がちで、小さな“そいつ”が鳴いた。

……つて、猫！？

小さな彼女の小さな両手に、すっぽりと収まっていた小さなそいつは、紛れもなく真っ白な子猫だった。

「駄目だろ連れて来ちゃ！」

真っ先に、滅多にしないツツコミを入れる。

「だって、可愛かった！あんな所に捨てられていて、もしカラスにいじめられたりしたらどうするのだろうか！」

彼女も負けじと食い下がる。

「だからと言って、学校にそんなもの連れて来るな！」

「何だと！？君には緑色の血が流れているのか！」

「そういう問題じゃないだろう！お前は小学生か！とにかく学校じゃ飼えないんだから、体育館の裏にでも置いてこい！」

「またそんな酷いことを……。こころ辺のカラスは気性が荒いのだぞ！食べられちゃったらどうすると言っつのだ！」

「煩い！いいから置いてこい！」

——けんけんがくがくと言い争い、結局僕に負かされた彼女が、むすつとした顔で昇降口から出て行った。遠くから「お前はピッコロかー！」とか何とか叫ぶ声が聞こえたような気がしたが、まあ空耳だろう。

はあ、と大仰な溜め息をつき、僕はようやく教室に向かって歩き出した。

久し振りに大きな声を出したせいで、まだ授業も始まらない内から、とんでもない疲労感に見舞われている。

——それにしても、と、僕は先程の子猫と、泣きそうな顔で必死に反論をする彼女を交互に思い出した。

……可愛かったな。

どちらとは、言わないが。

——正直、彼女も猫も、両方可愛かった。この時拾った猫が、後にある重要な役割を果たすことになるうとは、当時の僕も、彼女も、誰も予想していなかった。

桜の樹の下にて、

春夏秋冬季節は巡り、私は高校生活三年間を無事終業した。彼に出会ったのが、もう三年前の出来事だとは信じ難い。時が経つのは本当にあつと言つ間である。

「……ねえ？白猫クン」

卒業式も終わり、私は現在体育館の裏手で、三年の始めに拾つてきた白猫と戯れていた。

いつの間にかこの場所に住み着いていた彼は、私が心配した、“カラスにいじめられる”というようなことはなく、すくすくと成長していった。

果たしてこんな単語が存在するのは知らないが、今では立派な成猫だ。こんなところにも、時の経過というものを感ずる。

人懐っこい性格の彼は、にやごにやごと地面に体を擦り付けていて、何だかお気楽そうで羨ましかった。

「聞きたまえ、白猫クン」

私はこのもやもやする気持ちを少しでも晴らすべく、足元の香気な白猫に話し掛けた。

「彼は結局……いつになったら、私の告白に返事をくれるのだろう

か？」

——そう。何を隠そう、私は約一年前の春、つまり前年度の始めに、彼に告白をしたのだった。

二年生の時に彼がしてくれたような、家庭の事情の告白とかではない。“愛の告白”だ。

「私は、春が好き」

柔らかな日差しの中、薄い色の花を咲かせた木の下で、彼女は言った。

「ぽかぽかの陽気が暖かくて、ついつい微睡みがちになってしまう春が好き」

お前はいつでも微睡みがちだろうと、僕はセンスのないジョークを返した。

「私は、夏が好き」

じりじりと容赦なく肌を焦がす日差しの中、青くてみずみずしい葉を茂らせた木の下で、彼女は言った。

「何だかとてもわくわくして、ふわふわと浮き足立ってしまう夏が

好き」

お前はいつでも浮き足立っているだろうと、僕はセンスのないジョークを返したが、もしかしたら彼女はそれを嫌味と受け取ったかもしれない。

「私は、秋が好き」

澄みきつた高い空から降り注ぐ日差しの中、はらはらと朱や黄色の落ち葉が舞い落ちる木の下で、彼女は言った。

「涼しくて頭がすつきりとするから、いろいろなことを吸収できる秋が好き」

それには僕も同感だったが、彼女の意見に賛同するのも何となく癪だったので、僕は短く“ああ”とだけ返した。

「私は、冬が好き」

厚い雲の切れ間からかろうじて届く日差しの中、すっかり丸裸になっってしまった木の下で、彼女は言った。

「植物や動物が息を潜めているようで、実はこれから訪れようとしている眩しくも輝かしい日々に向けて、土の下で力強く鼓動を繰り返している冬が好き」

僕は冬は嫌いだと、面白くも何ともないような返事をしようとしたが、珍しく彼女が文学的な表現を使ったので、僕は思い直して“寒いな”と返してやった。…やはりセンスのないジョークだったと思っている。

くると季節が巡る度、ころころと彼女の気分も変わる。

気分屋なのか、はたまた周りの雰囲気にも翻弄されやすい典型的な日本人なのか…恐らく前者だな、と僕は勝手に答えを導き出したりした。

「私は、」

季節が一巡りして、また、柔らかな日射しの中、やや綻び始めた蕾を携えた木の下で、彼女が言った。

「春が好きなんだろう」

去年も聞いたと付け足せば、彼女はしかし、首を左右に小さく振った。

「……？」

僕はそれを怪訝に思い、手元の本から顔を上げると、眉根を寄せて彼女を見た。

「私は、」

「君のことが好き」

——一瞬、世界から音が消え失せたのかと思った。

ややあつて、“ああそうか、彼女は気分屋なんかじゃなくて、単なる嘘つきだったのか”と僕は気付いた。

…が、僕の読みはどうやら違っていたらしい。

「私はこれまで、季節がどうだとかいうことに関しては、正直なんの興味もなかった」

彼女も文庫本に栞を挟むと、僕を見据えるように顔を上げた。

「でも、君と過ごすようになってからは、その日の天気だとか、その時の季節だとかが、無性に好きだと思つようになった」

「それで、最近気付いたのだけれど…」

「それって私、季節が好きなんじゃなくて、君のことが好きなんだ」

「君が隣にいてくれるから、いつでも楽しいし、その時その時を大好きになることが出来たんだ」

くると季節が巡っても、ころころと気分が変わっても、決して微動だにしなかった彼女の表情筋。

そんな彼女が、今、微かに笑っていた。

2ミリくらい細められた両目と、両端合わせて1センチ程吊り上げられた口角。僕以外の人間が見たって、きっとそれが彼女の“笑顔”だなんて、誰も分らないだろう。

しかし、僕は“僕”であって“僕以外の人間”ではない訳で――

急にかつと顔が熱くなり、僕は走ってその場から逃げ出した。

確かに彼女は気分屋ではなかったし、更には嘘つきでもなかったらしい。

強いて言うなら、彼女は犯罪者。

鍵を掛けたはずの僕の心に不法侵入して、散々そこを荒らし回ったかと思えば、挙げ句の果てにはそれ自体を窃盗。

…勘弁してくれ。

治まらない動悸に困惑を覚えつつ空を仰げば、“眩しくも輝かしい” 青空が広がっていた。

どうしたものだろうか…。

底抜けに青い空は、まるで僕自身の青さを映しているようで…。仕方がないので、僕はやり場のない脱力感を、苦笑と共に空に送った。

盗られた心は返って来そうにない。

「彼はあの後全力疾走で去ったきり、次に会った時から、まるで

何事もなかったかのように接し出したのだよ」

あれは中々にショックだった。あまりのショックに、数日間おやつが喉を通らなかったくらいだ。

親指の付け根の辺りに、激痛が走った。

——数秒の間を置いて、“猫に引っ掻かれて咬み付かれた”ということを理解した私は、

「……………っふ、ふやあああああああああああああああああああああ
ああ——！」

出せる限りの大声で、絶叫した。

「ふあああ！いいいい痛いい！これは痛いぞしかないいい！」

さっきの叫び声に驚いたらしい白猫は、痛がる私を置き去りにして、さっさとどこかへ逃げてしまった。私は虚しくも一人で激痛に悶絶する。

右手の甲を見てみれば、数本の赤い線と、赤い点が浮かび上がっていて、そこからたらりと赤い血液が流れていた。

「ふわあああ！血が出てる！痛いな、痛いぞ！」

意外ときつくやられたようだ。あまりの痛さに、もう私はパニック状態である。

「おい、どうした！？何やら破廉恥な叫び声が聞こえてきたが……」

しばらくわあわあと騒いでいると、そんな台詞と共に彼が現れた。

「だだ……誰が破廉恥か！ああ、だがいいところに！痛いのだぞこれがかし！」

私は半狂乱になりつつも、彼の元へと走り寄る。彼は私の右手を見

ると、まずは落ち着くようにと言ってから、水道場まで連れて行った。

「……大丈夫か？」

弱い水流で、彼に右手の甲を濯いで貰うこと数分。私はすっかり落ち着きを取り戻していた。

「んん……面目ない」

そして、馬鹿みたくに取り乱してしまったことと、彼が私の手に触れているというこの両方に、大変恥ずかしい気持ちになっていた。

「あの猫か？」

蛇口を捻って水を止めながら、彼が短く質問をする。

「まあ、その……じゃれていただけであるが」

決まり悪い思いでいっぱいの方は、その質問に小さな声でぼそぼそと答える。ふう、と息をついた彼が、制服のポケットからハンカチを取り出して、そっと手を包むように水気を拭ってくれた。

「一応保健室で消毒してもらって来い」

そう言って、軽く曲げていた腰を伸ばす彼。こちらを見下ろすその顔を見れば、くつきりと眉間に皺が寄せられていた。

「うつ……申し訳ない」

私はちらりと手の甲に視線をやってから、こうべを垂れて大人しく保健室に向かった。

保健室に行ったら、消毒をしてからガーゼで傷口を保護してくれた。その上から手の甲をそつと撫でながら、私は先程の彼の手を思い出していた。

彼の大きな手は骨ばっていて、かなり荒れていた。しかし、傷口を洗う手付きは、物凄く優しく繊細なものであった。

——そこまで考えたところで、今の私はとても気持ちが悪いくらいことに気付いた。“そう言えば体育館裏に荷物を置きっぱなしにしていたな”、なんて些細なことを考えつつ、その変態染みた思考を逸らそうと試みたりする。

……今日の私は何かが変わである。恐らく“悩める乙女”故のことであろうが、何となく落ち着かずにそわそわしてしまう。

そんなことを考えながら駐輪所の側を通り掛かると、今日はもう誰もいないはずのその場に、人影があった。よく見なくても、彼である。

私はゆっくりと進行方向を変更し、誰かの……と言っても私のだろうが、自転車に腰掛けている彼に近付いた。

「……先程はご迷惑をお掛けした。お陰様で、手当てをしてもらって来た」

そう言つてちよい、と頭を下げる。彼が座っていたのは案の定私の自転車で、その前籠の中には、私が置き忘れてきたはずの荷物が入っていた。

「あ、荷物を持つて来てくれたのだろうか？どうもありがとう」

……返事はない。彼は、先刻からずっと難しい顔付きでどこか一点を睨んでいて、一切の反応を示さない。

「……怒っているのだろうか。私がいかに与太郎だったから……」

私は彼の横顔を、穴が空く程じいつと見詰めた。

「……さつき、」

何十秒かの静かな時間が過ぎた時、ようやく彼が口を開いた。

「さっき猫に会って、伝言を頼まれた」

「……え？」

一体何を言い出すのかと思えば、それは、彼という人物にはおよそ似合わない、大変メルヘンな発言であった。

「え……あの、何て……」

「“怪我をさせてごめん”と」

私はその発言の意味について尋ねたのだが、彼は“猫からの伝言”の方を報告してくれた。

「そ……ソウデスカ」

「あと……“いつも遊んでくれてありがとう”」

ここで、彼がこちらに顔を向ける。

「“怪我の具合はどうだ？”」

至って真面目な面持ちで、次々と伝言を伝える彼。それがいつものセンスのないジョークではないことに気付いた私は、口をつぐんで“伝言”を聞いた。

「いつも遊んでくれてありがとう」

「あの時は逃げてしまつてすまなかつた」

「ただ……気持ちの収集が付かなかつただけなんだ」

「——そこまで聞いたところで、私は“おや？”と思った。それが、ただの猫の伝言のようにには聞こえなくなったからだ。」

「だけど、今ならやつと言える」

彼は自転車から降りて、私と向き合う。

「随分待たせてしまつたが……、」

……もしや、と思った。

「——僕も、お前のことが好きだ」

——かつ、と顔が熱くなるのを感じた。目をぱちぱちさせながら彼を見上げれば、いつも病的に青白い彼の顔にも、ほんのりと朱が差していた。

「猫の伝言なんて称さなければ、こういうことすら言えない僕だが、

」

そ、と彼の左手が伸ばされる。

「もし、お前の気持ちが変わっていなくて、こんな僕でも良いと言ってくれるのなら、」

ぐぐつ、と眉間に皺が寄せられるのに比例して、彼の顔がどんどん赤くなる。

「その……僕と、つ……付き合って、欲しい」

呻くように、絞り出すように紡がれた、低い、低い、彼の声。差し出した左手は微かに震えているように見えたが、それでも、彼は決して、私から視線を逸らすことはなかった。

まさかこのタイミングでいつかの返事をされるとは思わっていなかったものだから、私はすっかり固まってしまう。別れの日に新たな関係を作り出そうとするなんて……それって君、何だかロマンチックじゃないか。

時間がゆるゆると経過するに従い、次第に情けなく歪んでいく彼の顔。そんな彼を見ていると、思わず私の顔が緩んでしまう。

この沈黙に耐え切れなくなったのか、彼が再び口を開こうとした時。私は“きつと彼にしか分からない満面の笑み”を浮かべて、こう言った。

「私が……その手を握り返さないでも？」

私は自分の左手を持ち上げると、それからそれを、彼の所在無さげな左手に絡める。

「え……あ、これって、つまり……、」

その繋がった二つの手を見ながら、彼は口をぱくぱくさせた。いつもどこかを睨んでいるその瞳は、今は大きく見開かれている。

——その時、どこか遠くから吹いてきた風が、私たちの間に一枚の桜の花びらを運んだ。

「そう。私は……、」

ほら、答えなんて決まっている。

だって、私たちの転換点は、いつでも桜時なのだから。

駐輪所にて、（後書き）

“ある凸凹な二人の話”ではこれが最終話でしたが、“桜涙雨を越えて。”ではオリジナルの落ちが付きます。

明日更新予定ですので、もう一話だけお付き合い下さい。

以上後書き、夢来でした。

君の隣にて、

「……何なんだ、これは」

——それが、私の渡したノートを読み終わった、彼の第一声だった。場所は暖かな陽の光が差し込む、南向きのリビング。シンプルながらも冷めた雰囲気はなく、柔らかな明るさに包まれた室内に、私と彼は居た。

長方形の木製テーブルに着く彼と、その前の席に座る私。午前十時のリビングには、ゆったりとした時間が流れていた。

「だから……最初に言ったように、私たちの青春のメモリアルである」

そのゆったりな時間の中、彼は左手で眉間の皺を解しながら、疲れたようにコーヒーを啜っている。そんな彼に向かって、私は彼がノートを読み始める前にも言ったのと、全く同じ台詞を繰り返した。

「君が話してくれた当時の体験談や、その時の私の日記などを元に
して、ノートにまとめてみたのだ」

「……それは分かった。しかし、」

彼は手にしたマグカップを机上に置くと、少し困ったような顔を
して続ける。

「少し、人の……私の目線で書き過ぎではないか？」

……言われると思った。

だから、私はあらかじめ用意していた答えを返した。

「職業病」

「あのな……。人の体験談を勝手に人の目線で書くのと、お前が小
説家なのとは、何ら関係性がないぞ」

そう言っばつさりと切り捨てた彼は、ついつ、とノートをこちらに押しやり、再びコーヒーに口を付ける。

——そう、彼が言ったように、私は小説家だ。

高校卒業後、それぞれの夢に向かって、各々が選んだ大学に進んだ私たちは、見事夢を叶えて再会を果たした。

——私は小説家に、彼は薬剤師に。

……それも、随分昔の話だ。私たちは、もう三十も半ばに差し掛かっている。

お互い仕事にも慣れ、心にゆとりができた頃、我々はようやく結婚に漕ぎ着けた。今日は二人とも仕事がなく、久し振りにのんびりとした時間を過ごせるかと思ったのだが……。

「……申し訳ない」

ぽつりと呟いた私に、彼は驚いたような顔を向ける。

「君がこういう物を好まないことは知っていたはずなのに、修羅場のノリと勢いで書いてしまったこれを、どうしても君に見せずにはいられなかった。そんなこともあったなあって、くすりと笑ってもらえればと……思ってしまったのである」

そつとノートを取り上げると、私はそのまま立ち上がる。

「しかし……、私は君を、余計に疲れさせてしまったようだ。浅はかであった、申し訳ない」

ぺこり、と一礼して、私はそそくさとその場を去る……はずだった。

「待て」

しかし、彼の横を通り過ぎようとした時、ぬつと伸びてきた手に掴まれて、私はぴたりと動きを止める他なかった。

「何を勝手に暴走している」

半ば私を心配しつつ、半ば呆れた口調で、彼が私を戒める。

「いや……だが、しかし……」

こちらを見詰める、暗い色のじっとした目。その顔は例の仏頂面だった。何となく、それが怒っている表情に見えて、私は何と云ったら良いものかと、もごもごと言い淀んだ。

——すると、

「あつ、」

そんな私を見かねたとでも言うような様子で、彼が、それまで掴んでいた私の腕をぐいっと引いた。

「ふ、う……」

すぐさま彼の腕が巻き付いて、唇が奪われる。何度となく味わってきたそれは、本日もやはり乾燥していた。

かさかさとした感触が、痒いようなくすぐったいような感覚を私に与える。

何度か角度を変えて、啄むように唇を重ね合わせる彼。だんだんと頭に血が巡って行き、顔がとても熱くなる私。

酸欠やら何やらで、そろそろ頭も身体もおかしくなってしまうそうになった時、ようやく彼が身を離れた。

「……何年も一緒にいて、分からんか？」

何年経つても、ぞろりと長い彼の髪。その間から覗く顔は、実に満足そうな形に変えられていた。ぐい、と片方の口角を上げて、実に悪役っぽく笑っていたのだ。

「だから……、」

“ああ、様になるなあ……”なんて考えながら、また先程述べたことを繰り返そうとしたら、

「そうではないことくらい分かれ」

彼の言葉に遮られた。まだとろんとする頭で、私は何とか聞き返す。

「どういう……ことだろうか？」

「私は大分昔からお前の表情を見分けられるというのに、何故お前は分からん？ あんなもの……所謂照れ隠しに過ぎん」

そう言った彼の手が後頭部に伸びてきて、いつかのように、私の顔を彼の肩口にうずめた。

「……ん、加齢臭」

「まだしないだろう」

「うん、“所謂照れ隠し”。……何だか、これって私、恥ずかしい」

「これでお互い様だ」

「そうなるのだろうか？」

「……そう言えば、“私たちの転換点は、いつでも桜時”なのだったな？」

彼が私を少しだけ離して、その瞳を覗き込む。

「……そろそろ、子供でもつくるか？」

「なっ……！？センスのない冗談はよしたまえよ、君」

「冗談なものか」

——そうして、私たちは互いに笑みを溢した。

ああ、なんて贅沢で、なんて幸せな時間なんだろう。

ひとしきり笑いあつた後、私はふと庭に面した窓に顔を向けた。その向こう側には、一本の背の低い桜の樹が植えられている。

「……ねえ、君」

再び彼に視線を戻す。

「こどもの名前は、男の子でも女の子でも、“桜”なんてセンスがあると思わないかい？」

「ああ……そうだな」

「私のつまらないジョークよりよっぽどセンスが良い」と言いながら、彼が私を抱き込んだ。

「——だが、しかし。今はもう少し、こうしていたい」

「……んん、私も」

大きな彼に、すっぽりと包まれる小さな私。

目に見えて、触れることだってできる幸福。その、何物にも代え難い最高の幸せを、もっと強く、もっと身近に感じるため、私はそおと目を閉じた。

その時もう一度、今度は一瞬だけ、両の瞳に写り込んだ庭の桜の樹。

——その蕾は、もう僅かに綻び始めていた。

君の隣にて、（後書き）

いかがでしたでしょうか？“桜涙雨を越えて。”これにて終幕です。

この小説の中では、どうやら凸凹な二人は無事結婚できたようです。ハッピーエンドにできてよかったと思います。

ここまでお付き合い下さった方、ありがとうございました。こちらを無事まとめることができたので、次回からこの二人の短編集（本家）、“ある凸凹な二人の話”の更新を再開する予定です。よろしければそちらもご一読下さい。

以上後書き、夢来でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6109r/>

桜涙雨を越えて。

2011年3月22日15時52分発行